

# 自然エネを復興の象徴に

原発事故からはや三年、賠償金は働く理由と意義を奪い、地図に書かれた線引きは区別と差別を生む。不満とねたみが地域コミュニティーをたたく壊し、それでも多く



いわきおてんとSUN企業組合  
コミュニティー電力担当  
島村守彦さん



の人はいろいろな思いを押し殺して暮らしてしまっている。そんな理不尽に覆われた福島に今必要なのは希望と夢だと思えます。それも与えられるのではなく自らがつくり出す希

望と夢です。

昨年二月に法人化した「いわきおてんとSUN企業組合」が手がけるコミュニティー電力事業は地域再生の手段、脱原発の代替案として自然エネルギー事業に取り組んでいます。きっかけとなったのはライフラインが途絶えた津波被災地に太陽光パネルと蓄電池を運び、明かりをともす活動でした。その場所が暗ければ暗いほど、一筋の明かりは希望となることを強く感じました。

原発事故によりコンセントの先を見るようになった私たち。コンセントの先には復興のシンボルとなる夢と希望が必要で

す。藤棚式に太陽光パネルを設置し、下で農作物を作るソーラーシェアリング方式です。

「いわきおてんとSUN企業組合」が手がけるコミュニティー電力事業は地域再生の手段、脱原発の代替案として自然エネルギー事業に取り組んでいます。きっかけとなったのはライフラインが途絶えた津波被災地に太陽光パネルと蓄電池を運び、明かりをともす活動でした。その場所が暗ければ暗いほど、一筋の明かりは希望となることを強く感じました。原発事故によりコンセントの先を見るようになった私たち。コンセントの先には復興のシンボルとなる夢と希望が必要で

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。